



## A different kind of Christmas Donna Rasalan Lampa

December usually has me looking forward to celebrating Christmas with family and friends. Filipinos like me who do not live with their families take a vacation around this time so we can be home for the holidays.

But the COVID-19 pandemic has turned 2020 into a strangely different year, hasn't it? In the Philippines, stricter lockdowns have been in place since March to help flatten the curve. Many schools and workplaces remain empty because working and learning are still done remotely. People continue to order food and groceries online to avoid going out, and even domestic travel is still restricted. Holding parties with people one doesn't live with is also discouraged, so I imagine Christmas in the Philippines will be different this year.

I also find myself thinking about friends who have lost their parents and loved ones to the novel coronavirus. I'm sure Christmas this year would be even more different for them.

I'll have a simpler, quieter Christmas myself because for the very first time, I won't be spending it with family in the house I grew up in. It's safer to avoid crossing national borders for now, so it'll just be a merry little Christmas for me right here in Higashikawa—and it's just as well, for in many ways, this town already feels like home.

My hope is that wherever Christmas 2020 finds you, your heart will feel right at home there, too.

## いつもと違うクリスマス ドナ・ラサラン・ランパ

12月と言えば、普段は家族や友人とクリスマスのお祝いをする楽しい季節です。私のように家族と離れて暮らすフィリピンの人達は、この時期帰省のために休暇を取ります。

でも、2020年はコロナ禍のために異色な年になりましたよね。フィリピンでは、3月以来、感染者急増のカーブを抑えるために、より厳しいロックダウンが行われています。仕事も学習もリモートなので学校や職場の多くが空っぽ。皆外出を避けて、食べ物や食料品を未だにネット注文しています。国内旅行ですらまだ制限されています。同居でない人とのパーティもやめるように言われています。だから今年の故郷のクリスマスは違ったものになるでしょう。

気づけば両親や愛する人を新型コロナで失った友人のことを考えている自分がいます。彼らにとっては今年のクリスマスはいっそう異なるものになるに違いありません。

私自身もより地味で静かなクリスマスを過ごすことになるでしょう。生まれて初めて実家で家族と過ごさないクリスマスだからです。今のところ国境を越えるのも避けたほうが安全です。だから、私はここ東川でささやかなメリークリスマスとなりそうです。まあそれはそれで、いろんな意味でこの町は私にとっては、もう故郷みたいなものですからね。

クリスマス2020、どこにいても、皆さんがそこで心落ち着いていられるように。

(訳:宮地晶子)

英語教育指導員 宮地晶子の

エイゴノマナビカタ

第175回

## 卒業生とスラッシュ読みと

「先生、スラッシュ読みはどうか」—大学入試を控えて、長文を読むスピードが上がらないという高校生から質問です。そのとき、思い出しました。この夏会った別の教え子（こちらは大学生）が、「高3の時に、スラッシュ読みに目覚めて、英語力が急にアップした」と話していたことを。早速そう伝えました。スラッシュ／とは、文や語を区切るための斜めの線。英文は長くなると主語と動詞の固まりが1文に3つ入ることなど普通です。そのとき文

の中の固まりが見えたら、英語を読むスピードは格段に上がります。文法（文の構造）そのものですね。中学校の授業でもやっています。「日本人は話すのは苦手だけど、読むのは大丈夫」と言われたのは昔の話。今では大学生も長文を読む力が落ちていきます。学校で表面的な会話ばかりやっていたら、中身のある英語には到達しないでしょう。話戻って、夏に会った大学生はしっかり頑張っている様子。頼もしい。でもそんな彼が「是非これだけは中学生に伝えて欲しい」と言ったことがあります。それは「中学生のときにもっと本気で勉強しとけばよかった。ものすごく後悔している」ビックリしました。だってよく頑張っていたから。でも彼は勉強しなすぎて私に呆れられた思い出があると言います。さらに驚いたのは真面目一筋に授業をしていると思いついて私に「あの話が面白かった」などと私が忘れてしまっているような与太話を覚えているのです。ア～恥づかしい。何はともあれ、中学生には君のメッセージをすぐに伝えたいよ。だから安心して大学でも頑張るね。